

## 第2回秋田市総合計画・地方創生懇話会

日 時 令和7年9月2日(火) 午前10時～正午

会 場 秋田キャッスルホテル 4階 放光の間

### 出席者

#### 秋田市総合計画・地方創生懇話会委員（18名中16名出席）

佐藤裕之委員、櫻田善英委員、平野浩之委員、臼木智昭委員、吉川裕太委員、竹島和憲委員、豊田哲也委員、水野勇気委員、深澤功委員、若松亜紀委員、泉真紀子委員、黒崎義雄委員、菅原魁人委員、佐々木由梨子委員、藤谷加奈子委員、及川真一委員

（欠席：小杉栄次郎委員、湊元志委員は欠席）

### 市 側

市長、柿崎副市長、企画財政部長、企画財政部次長、総務部次長、観光文化スポーツ部理事、福祉保健部次長、子ども未来部次長、環境部次長、産業振興部次長、都市整備部次長、企画調整課長、人口減少・移住定住対策課長

### 次 第

1 開会

2 市長あいさつ

3 議事

(1) 将来都市像の体系（案）および「戦略」（案）について 【資料1～4】

(2) 秋田市人口ビジョン改訂概要（目指すべき将来人口）について 【資料5】

(3) 第3回懇話会における分科会についてと分科会長の選出 【資料6】

(4) その他

4 閉会

※【参考資料】第1回秋田市総合計画・地方創生懇話会 意見対応一覧表

## 第2回懇話会会議録

- 1 開会 (省略)
- 2 市長あいさつ (省略)
- 3 議事

### 議事(1) 将来都市像の体系(案)および「戦略」(案)について

事務局 (資料1～4に基づき説明)

会長 まず初めに資料1について質問、意見はないか。

委員 秋田市における基本理念が5年で変わることには違和感がある。ビジョンはある程度中長期で変わることもあると思うが、このまちの本来のあり方や理念はそう変わるものではないと思う。

秋田市民憲章が昭和36年に制定されており、公民館や公園など様々なところに掲示されているが、私自身、市民憲章をしっかりと分かっているか、あるいは市民の皆さんに根付いているのかということ、そうではないように感じている。また、知人からは、綾部市では市民憲章の推進に市として取り組んでいるという話も聞いている。秋田市民憲章は昭和36年の制定なので、第15次総合計画の5年目が、制定されて70周年という節目と重なるが、改めて、秋田市民が秋田市に住む人間としての心根になりそうなものが秋田市民憲章だと思うので、これを基本理念のような形で考えて、これからのまちづくりを推進していくのもいいのではないか。

事務局 市民憲章ということだが、総合計画も市民憲章もより良い地域社会を築いていくために大事な役割を担っていると捉えている。中身を見ても、豊かなまち、文化のまちなど時代を超えて多くの方が共有できるような視点を取り込まれているので、総合計画でも共有できる視点やキーワードは多いと受け止めている。位置づけの違いとして、総合計画は、行政が策定する市政運営に関する計画、市民憲章は市民の総意に基づいた、市民一人ひとりが実践すべきことと理解している。共通するところは活かしながら、それぞれどちらかということではなく、どちらも大事にしながら取り組んでいくべきだと思っている。

総合計画の基本理念について、計画自体は5年ごとに見直しを行っているが、現計画の基本理念は第12次の計画から引き継いでいる。現計画が14次なので15年続いているが、今回は見直したいと考えており、原案で考え

を示したいと思っている。

委員 背景もよく分かり、理解できた。こうしたものを大切にして考え方の連携をしていくことができれば素晴らしいものになると思う。

市長 確かにこの総合計画自体は、市政運営のための計画ではあるが、我々が頑張るだけではなく、基本理念や将来都市像をどうやって市民の皆さんと共有していくかが課題だと思っている。市民憲章は市民の皆さんがいろいろな場所で唱和したり公民館に飾っていたりと、共有できる場面やツールが多々あり、それには及ばないかもしれないが、この総合計画もぜひ市民の皆さんとわかりやすく共有していく方法、あるいは掲げる理念も考えていきたい。

会長 次に、資料2について質問・意見はあるか。

委員 6つの大学と記載しているが、6つとはどこの大学のことを示しているのか。秋田市には短期大学などと合わせると12の高等教育機関があると思う。

事務局 秋田大学、国際教養大学、秋田県立大学、秋田公立美術大学、ノースアジア大学、日本赤十字東北看護大学の6つの大学を示している。

委員 実際は12ある高等教育機関の中で6つに絞った理由が問われると思うが、どのように考えているのか。

事務局 我々とするとは高等教育機関のうちの大学にまずは着目して6つとしているが、高等専門学校や短期大学なども含めて高等教育機関はあるので、取組の内容によって連携はしていくべきものと思っている。

委員 そうであれば、12とした方が説明しやすいのではないか。短期大学などであっても、そこを拠点にアパートや飲食店など地域の経済が回っており、教育と経済というのは結びついていると思う。切り離して6つとしてしまうと、外された高等教育機関からするとなぜなのかと思われる。

会長 6つというのは大学というものを意識されて書かれていると私は理解している。決して排除しているのではないと思うが、この時点では、大学の数を書かなくてもいいのではないかと思うがどうか。

事務局	ご意見を踏まえて事務局で検討する。
会長	次に資料3と資料4は関連性があるので合わせて意見や質問はないか。
委員	<p>資料3の「プラスの循環戦略」という言葉はとてもいい言葉だと思ったが、②の「人・暮らし・未来への投資」のところで、今回の市の戦略として、子どもや若者に焦点を当ててるのか、という感想である。前回、高齢者の働き方についてお話をさせていただいており、例えば、この中に高齢者という文言は無くても、戦略4の「誰もが健康でいきいきと暮らせるまちをつくる」の「誰もが」の中に全世代が入ると思うが、これを見た高齢者は、子どもや若者に重点を置くのかなと少し寂しく感じるのではないかと思う。例えば、言い方を「全ての世代が健康でいきいきと暮らせるまちをつくる」のような書き方をしてもいいのではないか。</p> <p>また、稼ぐということもテーマだが、市民の方と話をしていると、秋田は人が集まるところが少ないと言う人が多い。企業誘致とあるが、その視点では、大きな企業を誘致するほかに、例えばディズニーランドのようなテーマパークや、イケアやコストコのような人が集まる施設があるといいという意見もよく聞く。秋田県民だけでは売り上げとして厳しいので、全国から来てもらえるような、秋田ならではのオンリーワンの施設があるといい。人が集まる魅力的な施設があるまちをつくるといった文言も入れてもらえると、市民としてはワクワクするし、何かつくってくれるのかな、考えてくれるのかな、と市民に伝わると思う。</p> <p>資料4について、戦略1のⅢとして「地元への就業機会の拡大と人材確保・育成支援」とあるが、例えば働き方の多様性をサポートするというイメージでもいいのではないかと思う。IT系やクリエイティブ職の方が秋田に住んでも東京の仕事を続けられるような支援を充実させたり、企業や個人に副業やフリーランスの案件を紹介する制度の整備を進めたりするのも面白いのではないか。副業というものもキーワードになっているような気がする。一つの仕事だけでは生活が成り立たない、お金を稼げないという面もあり、秋田市で副業する方を応援するといったことも面白いと思う。</p> <p>また、戦略2のⅣ「移住の促進」のところで、「移住と定住の後押し」というように、移住してもらうだけでなく、そのまま秋田を気に入って秋田に居てもらえるような文言が必要と思った。</p> <p>秋田市が開催した、若者によるワークショップの報告書も興味深く見たが、第1回の秋田市のここが好き、ここが困るというテーマで参加者が書き出していたことが、まさに今の秋田市の課題を浮き彫りにしていると思う。例えば今どきのアパートが少ないという意見について、今どきのアパートの整備に補助を出したり、秋田は北欧と気候が似ているので、北欧風の明</p>

るめの内装のデザインのアパートだったり、シェアハウス型のアパートだったり、ワークスペース付きの物件などの整備をするために力を入れてもいいのではないかと。

さらに、観光客を呼び込む仕組みというところで、今あるものをブラッシュアップするのも良いが、さらにオンリーワンの施設づくりも大切だと思う。5年でできるのか分からないが、例えば秋田は日本酒がおいしい地域なので、日本酒のテーマパークをつくるとか、秋田駅前に日本酒が出る蛇口をつくってそこで飲めるというのも楽しいのではないかと。ワクワクするようなまちづくりというものが見えるような計画にしてほしい。

事務局 「全ての世代」というところについては、事務局としても同じ意識なので、より伝わるよう工夫していきたいと思う。

「プラスの循環」については、第一に民間事業者が稼ぐための環境づくりのサポートというのが基本的な考えで、魅力ある施設づくりについても、まずは民間企業の施設というところになるかと思うが、市が直接どういう風に関われるかも含めて、どこまで計画に書き込めるかなど調整が必要と受け止めている。

働き方の多様性についても、より良い表現を工夫していきたい。

市長 働き方の多様性について、資料4に副業やフリーランスで場所を問わない働き方を応援していくという部分が表れていないが、戦略1「地域産業の活力を高め、働きがいのあるしごとの場をつくる」のところで検討したいと思う。

戦略2のIV「移住の促進」については、定住や二地域居住、国のふるさと住民登録制度などがあるので幅広く検討させていただきたい。

また、オンリーワンという部分については戦略2「県都の魅力を発信し、秋田市への新しいひとの流れをつくる」に入れられるのではないかとと思う。民間事業者の部分になるので、市の計画の中にどういう形で書けるのか検討したい。個人的には日本酒が大好きなので、蛇口をひねったら日本酒が出るというお話は、個人的には非常に興味がある。オンリーワンのものをどうつくっていくかということは、観光振興において重要なテーマになると思うので、検討していきたい。

委員 全体を通して、大きな枠組みでの議論なので、資料3のプラスの循環という戦略は非常にエッジが効いており、いい方向性だと思う。これをどう知らしめていくかという視点を明確にしたほうがいい。秋田市の魅力を外に発信して、理解していただき、移住していただき、企業にも来ていただき、投資も促すという観点からすると、情報を相手にどう伝達して理解しても

らうかといったことが極めて重要であり、そこを戦略の中に入れてもいいのではないかと。そのくらい重要度が増していると思う。今の時代は紙媒体で伝えることが少なくなっていておそらくほとんどの人が縦動画しか見ないと思う。具体的なプログラムとしてフィーチャリングし、部署も置いて戦略を外にアピールするというのを戦略の中に上位概念として入れ込むぐらいでもいいと思う。外向けに情報が広がるとそれがシビックプライドにもつながっていくと思う。

そのような観点からすると、戦略2は「県都の魅力を発信」でいいのか。県都を自覚するとしても、そんな矮小なことではなく、「秋田市の魅力」とした方がいいのではないかと。

また、戦略2のV「シティプロモーションの推進と関係人口の拡大」の変更の考え方に「市内外に向け本市をPR」とあるが、県内の市町村にも秋田市をPRするのか。想定しているのは、秋田県外の方に来てほしいということだと思うが、表現を注意しないと、他市町村から秋田市は生意気だと言われることも考えられるので、少し工夫をお願いしたい。

先ほど話に挙げた市民憲章について、全市民でなくても多くの方々がある程度口にできるようなシビックプライドの醸成は大事だと思う。秋田県民歌も象徴であり、みんなで歌えば自分たちは同じ同胞というイメージにつながる。このようなシビックプライドの醸成につながるものが戦略の中に一つにあってもいいのではないかと。

委員 プラスの循環戦略の中で、企業誘致は移住定住にもつながると思うが、東京などから帰ってくる際の働く場として重要な受け皿となるし、いろいろな知見が秋田に流れてくることは一つの魅力であり、取り組んでいかなければならない課題だと思うが、企業誘致によって実際にどれくらいの企業がきて、どのくらい雇用が増えたのか、Aターンでどのくらい戻ってきた人がいるのかなど、当初の説明で目標としては確認できるが、その後の実績がわからない。戦略に盛り込むに当たって、これらの成果やデータがあるのか教えてほしい。

事務局 企業誘致に関しては市で統計をとっており、昨今の状況はIT企業の進出が非常に多いと分析している。今のところ県と一緒に制度を構築しており、秋田市に進出しやすい形、また首都圏に対しては秋田市の魅力をPRしており、今後もこれについては継続していきたい。雇用の数字についてはデータが手元にないため、後日情報提供させていただく。

委員 プラスの循環戦略など、書いてあることは非常に納得できる部分もあるが、一つ質問がある。昨年9月に秋田県が都市計画区域マスタープランを策

定しているが、この戦略に企業誘致などいろいろなことを盛り込んだとき、県のマスタープランの中の範疇でしかできないのか。あるいは秋田市として一步踏み出すことができるのか確認したい。

市長 都市計画法上のマスタープランについては、いわゆる線引きがあるので、現状で市街化調整区域に何でも建てていくことはできない。線引きという意味では物理的な制約を受ける区域があり、企業誘致や公共施設の再配置などは、一定のゾーニングの中で行っていくことにはなるが、100%縛られるかということ、場合によっては線引きを変えることもあると思う。そういった意味では市の取組が全て縛られるわけではないと思っている。

委員 なぜそのような質問をしたかということ、市長がおっしゃったように企業誘致するとなれば工業地域や準工業地域にしか呼べないという話になってしまう。秋田市にも相当な農地があり、秋田に足りない食品加工の企業などを誘致するとしても、工場は工業地域に呼ぶことになってしまうとアクセスが悪くなるので、無秩序な都市開発をしていくことはないと思うが、農地周辺で農業と一体的に進めるような規制の緩和を進めていくべきである。

市長 現在、新たな工業団地の適地を調査しているが、インターチェンジの近くであれば、大半が農地で、市街化調整区域である。そのため、もしそういったところに企業誘致でものづくりを誘致する場合、農地を転換していかなければならない。そういう意味では攻めの戦略はしっかりと持っていきたいと思っている。

委員 資料4の戦略2のIV「移住の促進」について、変更の考え方を「第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略の施策を採用する。」とあるが、どのような判断でこのように書かれているのか教えてほしい。

事務局 前提として今回、総合計画と「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を統合するに当たって、従来の総合戦略にあった移住の促進という施策を移行するという意図である。

委員 採用という文言になっているが、総合戦略の取組を基本とするのか、ブラッシュアップしていくという意味なのか確認したい。

事務局 施策の分野として移住の促進を引き継いで取り組んでいくが、内容についてはブラッシュアップして議論しながら取り組んでいきたいと思う。

委員 市長は移住に力を入れていきたいと述べられていると思うが、その中で第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略が決まって上手くいっているとは思えないので、ぜひブラッシュアップして欲しい。

もう一つ、戦略2のI「観光振興と戦略的PRの展開」に関して、PRは当然大事だが、その前に現状分析が大事だと思う。気になるデータがあり、東北の夏祭りの推計観光消費額のトップが青森ねぶた祭で310億円。秋田竿燈まつりは82億円で、ここに大きな差がある。入り込み客数は青森が105万人で、秋田が103万人という数字が出ているが、それに対して4倍近く消費額に差があるので、どうすればもっとお金を使ってもらえるのか構造を分析した上でPRするべきだと思う。それがなければ客数は少し増えても経済効果が薄まってしまう。私も竿燈まつりに4日間出展していたが、インバウンドがこれだけ伸びている中で、体感として外国人が非常に少ないと思った。おそらく宿泊等の構造の問題もあるのではないかなと思うが、どうやったら泊まれるような状況を作れるのか、さらにもっと消費してもらうにはどういった仕組みがあるのか、せっかく素晴らしい竿燈まつりなので、そういった部分の分析から戦略を考えていただきたいと思う。

会長 従前からの観光の入り込み客数は6県で比較するとあまり高くないというデータもあり、インバウンドも含めて外国人の方の来訪および消費額も6県で比較すると低いという指摘はよく伺うことがあると思う。観光振興と戦略的PRの前に現状分析と課題を見出したうえで、どこに重点を置くかが大きな戦略で問われている、という指摘かなと思うが、今後具体化していく中で、こうした意欲的な取組をするとか、現状の課題を克服する提案を考えていることを、後日報告してほしい。

委員 来年、再来年は平日開催になるので普通にやると間違いなく落ち込むが、これを逆に落ち込まないようにしたい。せめて横ばいぐらいであればそれだけでも本来は評価されるべきことだと思う。結果的に秋田の活性化につながると思うので、ぜひ考えていただきたい。

委員 資料4の戦略3のⅢ「若者の希望と挑戦を応援するまちの推進」について、変更の考え方を読み、若者の方に関しては、出会い、結婚、挑戦、移住・定住への後押しといった内容が書かれているのでよく分かったが、子どもに関してはどんな考え方をしているのか教えていただきたい。

事務局 今回の総合計画を策定する前段で市民意識調査を実施しているが、その中で子どもの育成支援に関して市が取り組むべきという回答が前回に比べて伸びており、特に子どもについては、力を入れていくべきところだという

根拠になると受け止めている。その中で戦略の中に引き続き重点プログラムとして位置づけるべきだと整理をしている。

委員 現計画の戦略4のⅡでは「安心して子育てできる環境の整備」となっていて、次期計画の戦略3のⅡでは「こどもが健やかに育つ環境の整備」と名称を変えている。現計画の方は親側の視点が大きな比重を占め、例えば保育所の数や子どもの受け入れ人数を増やすなど、親がいかに働きやすいかといったことを重点的に考えていると思うが、次期計画の方は子ども側の視点が入っているのだと感じた。私も親として、子どもの視点に立つと12時間も保育園にいることが果たしていいことなのだろうかと思う。病児保育なども求められているが、例えば私達が子どもの頃、風邪を引いたりおなかが痛いとき、どこかに預けられることを望んでいたか。私だったら、家で母に手を当ててもらい、おなかをなでてもらうなどして、家に居ることを望んでいたはずであり、皆さんもそうではないかと思う。そのように子ども側の視点を市としても考えてくれているのかなと感じた。実際にそうしていくためには、職場の環境なども関係してくる。子どもの視点、職場の休みの取りやすさ、父親の育児参加なども、ここに加えていただきたい。

事務局 ご指摘のとおり、子どもが主役、子どもファースト、子ども視点という意図で、「こどもが健やかに育つ環境の整備」としており、子ども視点を重視したいという意思の表れである。意見を踏まえて対応したいと思う。

委員 今回このような戦略を明確にしたことは素晴らしいことであり、ぜひ力強く進めていただきたいと思う。過去の経緯もあるし、今までの政策もあるので、これまでやってきたことをある程度続けていくことは必要だが、どんどん建物を建てようとするなど、お金のかかる話なので、新しい市長のもとで、秋田市が持っている手札は何かということや限界を認識した上で、今までやってきたことを多少整理しながら費用対効果も念頭に戦略的に取り組むべき。費用対効果を明確に言うと反感も買ってしまうだろうが、しっかりと考えていかないといけない。

資料4の戦略2のⅠ「観光振興と戦略的PRの展開」の順位が現計画よりも上がっていることはいいと思う。なぜかというと、企業誘致は非常にレッドオーシャンの世界だが、秋田市には秋田城という世界的にも極めて価値の高い観光資源を持っていながら全然インバウンドでお金が入ってこないという現実がある。ここはブルーオーシャンだと思っていて、このような部分の取組を戦略的に進めていただきたい。市町村は若干のお金を持っているだけで、あまり手札を持っていない。そもそも法規制することさえできない状況で、都市計画を頑張って変えるぐらいだが、実はあまり使われていな

い手札がある。インバウンド観光の振興については、中学校の英語の授業を使って、翻訳プロジェクトを進めたり、チャットGPTなど今までにないツールを使いながら市民をエンパワーメントするなど、若い市民にどうやって秋田市の経済を変えていけるか示しながら、新しい技術を使って今までできなかったことをやっていく。具体的に一緒に考えていきたいと思っており、後日具体的な提案も出したいと思っている。

委員 秋田市のにぎわいを考えたとき、秋田駅前がどうなのだろうかと思っている。マンションなどがたくさんできて、居酒屋もあり、芸術劇場や美術館もできたし、佐竹史料館も間もなくできる。堀の池もハスがきれいだし、竿燈もあるし、千秋公園もきれいになった。しかしにぎわいはどうだろうか。建物ができたが、平時はどうだろうか。イベントがあるときはいいとして、にぎわいが秋田駅前にどれくらいあるだろうかと常々思っている。長期のビジョンがあると思うので、結論は要らないが、秋田市として今考えていることをお聞きしたい。駅前の商店街が非常に少なくなり、広小路のアーケードがなくなって、仲小路も人のにぎわいが戻ってこない。その中で、秋田駅に降りたお客さんが秋田市のメインってどこだろう、と思うのではないか。郊外にはいろいろなものができているが、車で来た場合、秋田自動車道を降りて来ると明田地下道の隣の秋田中央道路を通る。市民も県民も、駅を中心として足を運ぶのが自然だろうと考えている。秋田市のこれからの展望として、秋田駅前の再開発や商店街のにぎわいといった考え方はあるのかというのが一つ。これは5年や10年で実現できることではないと思う。昔は銀座街、銀座街というのが駅前に2つあり、一般の商店の皆さんがにぎわいを生み出してくれたし、その隣には市場があり、近郊の方々が野菜や魚を運び、いろいろなにぎわいが醸し出されていた。同じようにはできないかもしれないが、駅前ににぎわいをつくるような施策が折り込めないか。資料3に、民間企業が「稼ぐ」ための環境づくりとサポート、人・暮らし・未来への投資と記載があるように、行政も投資をしながら未来の秋田市をつくる取組ができないかと感じている。

会長 なかなか難しいテーマであることと、全体の中でにぎわいを生みだしていくことも必要になってくるが、現段階でお話できることがあれば事務局から話してほしい。今後この計画を作っていく中で中心市街地のにぎわいづくりも重要なテーマになってくると思うが、いかがか。

委員 その前に、中心市街地に住む者として、エリアなかいちという素晴らしい施設ができ、先日の与次郎駅伝のときも非常に盛り上がっていて、秋田市として、エリアなかいちと秋田駅を結ぶ仲小路エリアを楽しく歩ける地域に

しようと力を入れていると感じている。公衆無線LANもあるので、中高生も自由にスマホを使える地域になっており、無料のスマホ充電ベンチをあちこちに置いてもらえればもっとにぎわいのある中心市街地になると思うので、今の施策をぜひ進めてほしい。

市長 資料4の戦略2のⅡに「芸術文化によるまちづくりと中心市街地活性化」とあるが、委員からいただいたお話は、日常の中のにぎわいや人の流れをどうつくるかというお話だと思う。美術館や千秋公園など、いろいろなものができたが、まさに芸術文化であり、ある意味非日常という意味でもあり、非日常を日常に変えていくような取組をしていかなければいけないと思っている。他の自治体では、病院や図書館、役所などのパブリック機能を中心市街地に持っていき、昼間人口を確保する取組をしている自治体もあるが、本市の場合はパブリックの機能が中心市街地から抜けてきた歴史がある。中長期で考えれば戻していくというのは可能なタイミングがあるのではと思うが、数年以内にできることではないので、公共機能を誘導していくやり方以外の日常の昼間人口、人の流れをつくる取組をしていかなければならないと思っている。秋田駅前から仲小路、エリアなかいち、千秋公園の回遊性をどう高めていくか、点在しているものをどう線にして面にしていくのか、非常に大きな課題でもあり、逆に市としては可能性のある分野、まだ手を付けきれていない分野だと思う。委員の皆さんは様々な自治体のまちをご覧になっていると思うので、こういうものがあつた、こういう取組をしているなど、まちをつくっていく部分について、いろいろなご提案をいただきたい。秋田市としても一生懸命考えていきたいと思う。

会長 改めて皆様方から資料3、4も含めて意見を承るタイミングをつくりたいと思っているが、議題(1)と密接に関連する議題(2)に移らせていただく。

## 議事(2) 秋田市人口ビジョン改訂概要(目指すべき将来人口)について

事務局 (資料5に基づき説明)

会長 資料5は秋田市の人口ビジョンで、一つ前は令和3年3月に改訂したものが数値として公表されており、今回は社人研の推計が改訂されたことに伴い、現状の足元を確認しつつ、シナリオを修正しながら、今回の新しい総合計画の中で、新しいシナリオと将来目標に向けて取組をラインナップしていくという構成になっている。足元の数字は現然としてデータはあるが、将来の目標として2040年で25万人ほどになるところを27万人ほどとしており、人口減少は続くが、落ち方を緩やかにしながら、足元の転出超過がある時点で均衡させて、さらに転入超過に転じていくといった取組も考えて

いくといった資料になっていると思う。このことについて質問を含め意見などはあるか。

委員 前回は出生数についてお話ししたが、資料5の2枚目の出生に関する仮定がおかしいと思う。2025年の市の仮定値が1.63となっているが、2023年の確定値は1.08であり、そこから今年1.63になるというのか。そもそものスタートラインの仮定が間違っており、この仮定に意味があるのか。これは将来展望ではなく願望ではないかと思える。その仮定を基にしたプランは、どこに意味があるのかとっており、前回は悲観にならざるを得ないという話をしたが、まだ願望を書き出しているのだから、これでは本当にやるべきことへ向かっていかないのではないかと思っている。人口の動態に関しては出生だけではないので、他のところで補うというのはわかるが、出生の仮定については、現実離れしているのではないかとと思う。

事務局 検討に取り入れていくのかどうか少し考えるが、貴重なご意見として承りたいと考えている。

委員 非常に興味深い資料ではあるのだが、これを見ただけだと、秋田市の人口動態はあまり分からない。2024年の数字を見ると、秋田市から東京23区への流出が差引き312人で仙台市への流出が差引き262人である。また、秋田県内からの流入が差引751人で、そのため県外への流出が本当は差引1,384人なのだが、数字を見ると633人しか流出していないように見える。なので、秋田市が秋田県内の他の市町村から人口を引き受けつつ、それを超える人数を県外に出しているという実態が見えるような資料にした方が、情報が共有できるのかなと思う。また、10代、20代について見ると、10歳以上29歳以下の人口約47,000人のうち、2024年の1年間で差引き1,134人が流出し、1年で10代、20代の人口の2.4%が流出している。それを見ると深刻だと感じるが、この資料だけではそれがよくわからない。さらに、政策を考える上で重要なのは男女の格差で、秋田市から東京23区への流出312人のうち男性は131人、女性は181人で女性の方が4割多くなっている。仙台市への流出を見ると、262人のうち男性は97人、女性は165人で、女性の方が7割多くなっている。秋田市からも若い女性がどんどん流出しているのだから、全体としてみると、そんなに減っていないように見えるが、秋田県内の人口を吸い取って、それを東京都や仙台市に吐き出しているという実態を踏まえた上で、現実味のある将来人口のビジョンを立てていただきたいと思う。

市長 出生に関する仮定に関しては、国、県、市と並べており、それぞれの2020

年の確定値を基にしているが、直近の出生率を起点にするかどうか、県の計画も見ながら調整していきたい。あまりにも現実のままでは苦しいところもあるが、夢物語では願望になるというところもあり、そこは少し検討してみたいと思う。

また、社会動態について、市外、県外に出ていってしまっている年代や性別はある程度把握をしており、県内の移動という意味では、他の市町村からするとありがたい話ではないのだと思うが、現実問題としては、秋田市がある種、秋田県内における人口のダム機能をしっかりと保っていくということも、今まで以上に必要になる。県外流出を秋田市でなんとか一定数止めることも考えていきたいと思っている。トータルでは、コロナ禍で一時的に社会増になった時期があったが、その後また社会減が拡大しているので、500人、600人という社会減を、まずは均衡する状態に持っていきたい。男女、年齢、性別があるわけだが、社会増への転換を最重要課題として、それを計画の中の様々な戦略に盛り込み、新たな事業を行っていきたくて考えている。出生数そのものを大きく上げるのはなかなか難しいので、社会減を社会増に転換することが、この5年間の総合計画の大きな主題の一つになるだろうと思っている。

委員

人口減少に関して、若者が県外に行ってしまうことが課題になっていると思うが、出生数に関して、女性は出産したいという思いが、昔と比べてなくなってきていると感じている。働き方も変わり、結婚したいとか子どもがほしいという考え方も、だいぶ変わってきているのではないかと思っている。人口を増やすためにというところで、一つ前の資料にもあったが、移住に力を入れていかないといけないのではないかと思っている。移住してもらって、秋田の方と結婚して出産してもらおうというところも、一つの仕組みになってくるのではないかと思うが、最近はテレビ番組などで移住がよく取り上げられており、魅力的な取組をしている自治体も多いので、秋田市としても大々的に取り組んでもらってニュースなどに取り上げていただかないと、県外の若者に触れられる機会はないのではないかと思っており、メディアを通じて大々的に移住を促進していけるといいと思う。

委員

広報・PRの話はまさにここにつながる話と思ってしていた。メディアの報道で秋田市は総合的に暮らしやすいまちといった評価もあるが、果たしてそれでこれからも人が来るのかなという思いがあり、私が先ほどPRと言ったのは、東北あるいは日本全体の中で、秋田市がどういう位置づけで、どういう特徴があつて、だから選択されるというストーリーを描けないと、人口の推計をしてもあまり意味がなく、そういった活動をして、スパイラルアップすることで、だんだん推計というものが変化していくことを秋田市

も望んでいると思うし、我々もそうである。そういう意味で、秋田市が、県内は別にして、県外に対してどういうアピールをしていくのか。また、中にいる人と外にいる人、それから中にいる人も外の方がきれいに見えるとか、暮らしやすそうに見えるという部分で、秋田という言葉に対するイメージのギャップがあると思うが、これはお互いの情報伝達に不足があるのではないのかと感じている。

委員 純移動の仮定について、大学に身を置く身として、15歳から19歳、20歳から24歳が転出超過になっているのは、致し方ないことである。県内全体で大学進学者数が約4,000人であるが、県内にある大学や短期大学、高等専門学校を合わせても、約2,000人しかキャパシティがない。ということは、半分は流出することになるわけで、私のいる大学も7割ぐらいが県外からの学生になっているということを考えると、県外から来てくれた人をどう定着させるのか、そこに重きを置かないと、この人口流出という話で、大学進学あるいは高校進学といったところで何とかしようとしても、例えば大学の定員を増やすとか大学をつくるといっても、そんなことは今の時代にできる話ではないので、そこよりも卒業した人間をどうやって秋田に留め置くかというところに力点を置くべきかと思う。

委員 人口減少に関して一つ意見としてお話ししたい。こういった議題というのはやはり数字で見ても減少ばかりで、社会増を目指して議論していくわけだが、なかなか前向きな言葉が出ないのが少し残念に思う中で、秋田市の人口の中で何か増えているものはないかと考えたときに、外国人の労働者が増えてきているという実感がある。観光でも、秋田県は他県と比べるとまだまだ数字は小さい方であるが、インバウンドが増えてきていると思う。ただ秋田市の中で見ると、そういったところは増えているのではないかと思う。そういった海外の方の人口の推移というのも、市民の皆さんに伝えられるような資料や指標もあると、多様な人たちが一緒に暮らしている市なのだということが視覚的にも分かるのではないかと思うので、海外の方とも一緒に暮らす市という視点も少しあるといいのではないかと思い、一つ意見として言わせていただく。

会長 資料5にこだわらずに資料1から4も含めて、トータルで何か意見や質問、確認しておきたいことはないか。

委員 資料4の戦略1のⅡ「都市と共生する活力ある農業の実現」という重点プログラムについて、私は農業の専門家ではないが、どういう状態を目指して、こういうことを書かれているのか教えてほしい。

事務局 秋田市が都市近郊型の農業ということで、都市と農地が近接する中で園芸など、稲作だけにとらわれない形の農業を伸ばしていく、そういう視点で取り組むための位置づけということになる。

委員 もう少しキラキラした話なのかなと思って期待したのだが、都市と共生するという話なので、私のイメージだと子供の頃のように、街があってその近くで緑がたくさんあるような、そんなキラキラしたことを目指されているのかなと思っていた。園芸などとはまた別のものがあると思う。

委員 資料5の出生に関する仮定について、もう一度、しっかり現状認識すべきだと思っている。未来が暗いとかではなく、1.63からスタートすることが間違っていると思う。2023年の秋田市の確定値が1.08、国が1.2であり、2024年の確定値は出ていないが国よりもおそらく低い中で、1.63でスタートして2030年に1.8としている。現実は今ここで、それに対して1.8を目指すということはいいと思うが、ただそのためのアプローチの仕方は絶対に変わらなければならないので、なぜそれをやらないことが許されるのか、私の感覚では正直わからない。民間だとこれはどういう前提でやっているのかと普通に怒られる。仮定に関してはしっかり設定すべきだと思う。

また、ふるさと納税の収支のデータを出していただいたが、直近の令和6年度が地方交付税で75%戻ってくることも含めると、9億7千万円プラスになっており、素晴らしいことだと思う。これが秋田市民への大いなる還元になるということをお秋田市として捉え、もっと増やしていくべき。その結果、市民のためのいろいろなことに使えるということになると思うので、私はふるさと納税に関して、しっかり目標を定めるべきではないかと改めてこのデータを見て思っており、ぜひ願います。

会長 ふるさと納税の総合計画の中での位置づけや具体的な施策というのは、これから検討いただくということとして、委員からの出生に関する仮定についての意見は、目標値がだめと言っているわけではないと私は理解した。ただ、出発点が現状よりも高い想定で出発するのか、現状がかなり低い数値として出発して、そこにたどり着くための努力をどう考えるのかということ、政策の建付けが変わるのではないかと意見かと思う。これからビジョンを確定させるに当たって現状の足元を振り返っていただく中で、検討していただくということになるかと思うが、今答えが欲しいということではなく、そういう前提の置き方一つで建付けが変わることだと思うので、今後の検討に活かしていただきたいと私からも申し添えておきたい。前回もかなりご指摘があったので、そこは考慮いただきたいと思う。

委員 今後の流れになると思うが、来春ぐらいには今回の会議体をまとめた資料ができあがると思う。現計画を見たが、どちらかというとデータ集というか、会議を取りまとめたような内容で、市民の方にお伝えするものではないような印象を受けた。ここでの話合いというのはおそらくは今後の秋田市のグランドデザインを描く場であろうというようなイメージなので、もちろん必要なデータをまとめたりすることも必要かと思うが、ぜひ秋田市民の方にお伝えできるような、そうしたまとめ方ができたらよいと思う。例えばここで話し合ったことを小学校や中学校で出前授業して、秋田市がこれからこんな未来を描いていると伝えるようなこともできるのではないかと思う。石川県の小松市長とお話する機会があったが、2040年ビジョンとして、我々がやっているようなことを写真や絵でまとめて、学校で授業をしているというような事例も聞いた。ぜひ市民の方にも広められるような資料が最終的に出来上がればよいなと思っている。

会長 今日充分にお話しいただけなかった方がいれば事務局の方にメールでお送りいただきたい。次の回で皆さんにフィードバックさせていただくような形にしたいと思う。

### 議事(3)第3回懇話会における分科会についてと分科会長の選出

会長 今まではトータルでのビジョンや、グランドデザインに関するコメントをいただいたが、第3回懇話会では、今回明示された戦略をいくつか統合した3つの分野ごとに分科会を開き、もう少し具体的な内容を議論いただく。資料6のとおり、1つ目の分科会としては、戦略1に紐づいた「産業振興・仕事づくり分科会」、2つ目の分科会として、戦略2と戦略3に紐づかせる形で「若者応援・まちの魅力向上分科会」、そして3つ目の分科会としては、戦略4と5に紐づかせた「健康長寿・安全安心分科会」として、それぞれの分科会ごとに会長を決めることも合わせてご提案したいのだが、「産業振興・仕事づくり分科会」は私が分科会長をさせていただき、「若者応援・まちの魅力向上分科会」は深澤委員に、「健康長寿・安全安心分科会」は及川委員にお願いをしたいと思います。事務局と私で検討させていただいた上での提案ということになるがいかがか。ご異議あるいはご質問があればお寄せいただきたい。

ご異議ないようなので、この分科会の案に基づいて次回の懇話会ではテーマに分かれて皆様からご議論をいただければと思う。

#### 議事(4)その他

会長 最後に事務局の方から何か連絡等はないか。

事務局 次回の懇話会の日程について、11月中旬を予定しており、決まり次第ご連絡させていただく。

会長 用意していた議事は以上となる。本日の議事はこれにて終了するが皆さんから特にないか。

市長 私の方から最後に、本日議論いただいたお礼と受け止めという意味で、お話をさせていただきたい。

竿燈まつりの経済効果について、分析としては、青森ねぶた祭の方が県外から来ている人が多いという話になっているが、そこはしょうがないではなく、竿燈まつりもどのようにして県外からお客様を呼び込むのかということで、50万円の席や100万円の席を作ればいいという話でもないが、青森ねぶた祭の場合はバイクパレードということで全国からバイクを乗っている人が来ており、無料のキャンプ場をその時期だけ開放するなどの仕掛けもある。そういった取組なども参考にして、観光文化スポーツ部に、竿燈まつりとしてどう稼ぐかの理想形を描いてほしいという話をしている。

ふるさと納税についても、現在増員をするということで体制を組んでいるが、30億円を超えると、全国トップ100ぐらいが見えてくるので、25億とか、さらに30億を超えるようなところを目指したいと思う。それにはティッシュと米だけではなく、3つ目、4つ目の柱をつくらないといけないと思っており、ぜひ頑張りたい。

PRのお話もあったが、ご指摘いただいたとおり、県都の魅力とか市内外に向けてというようなところではなくて、全国あるいは海外に向けて秋田市自体の魅力をどう発信していくか、SNSもそうだが、いい意味でしっかりと風呂敷を広げるといって、高い目標を持ってやっていきたい。そういった意味では重要度も上げて格上げをしてやっていきたい。それが市民の皆さんのシビックプライドにもつながっていくと思っている。

大学生や短大生などの7割が県外から来ているというお話は、これもまさにご指摘のとおりであり、県外からご縁があって秋田に来て、学んでくれている4年間の間に、秋田市にどう関わってもらおうか、どう魅力を感じてもらおうかということは、ぜひやってみたいと思っている。

企業誘致での雇用増や経済的な寄与度については、IT系の企業だと市内や県内から採用する場合も多いので、難しい部分はあるが、企業誘致を大きく目標として掲げている以上は、どのように秋田の経済や雇用に寄与し

ていくかというところは、なるべく見える化をしてみたいと思っている。

移住の促進にはインパクトが大事とのお話もあった。中身のインパクトと見せ方のインパクトと両方あると思うが、中身についてしっかりインパクトあるものを作っていくということと、それをしっかりと発信していく。自前で発信するだけでは難しいところもあるので、どういうメディアに載せられるかなど、そういうところも含めて考えてみたいと思う。

外国人が観光でも働くという意味でも増えている要素を見せるというお話もいただいた。外国人に限らず、本市への移住者も増えており、そういった増えている要素も資料提供させていただきたいと思っている。

市民の皆様への伝え方や共有についてのお話もいただいた。ただ数字を並べてデータや施策事業を並べ、それを市民の皆様と共有するのはなかなか難しいので、そういうことだけではなく、「少しずつ変わってきているな」とか、「動いているな」とか、見ていただけるようなまとめ方、伝え方も考えてみたいと思っている。

出生に関する仮定のご指摘については、しっかりと再検討させていただいて、少しでも地に足のついた形で将来予測したいと思う。

最後に、「都市と共生する」など、戦略の中の言葉や表現については、庁内で再検討し、次回までに整理をさせていただきたいと思う。貴重なご意見をたくさんいただき、心から感謝申し上げます。

---

#### 4 閉会（省略）